

『菅家後集』所載「492 元年立春 十二月十九日」作品考

〽七・八句「偏憑延喜開元曆、東北廻頭拜斗杓」の解釈をめぐって

一

『菅家後集』「492 元年立春 十二月十九日」の一首を取り挙げ、七・八句の「偏に延喜 東北に頭を廻らして斗杓を拝せしを」の二句の解釈について新たな訓みの提起を試みる。元曆を開くを憑み、注釈を進める上での「凡例」は前稿（注2）のそれに倣う。

二

492 元年立春 十二月十九日

本文

平仄

天啓長寒万物凋

○●○○○●●◎

晩冬催立早春朝

●○○○●●○○◎

淺深何水氷猶結

○○○○●○○●

高阜無山雪不消

○○●○○●●◎